

カフカスの民族問題

国際問題評論家 植田 樹

地理と民族

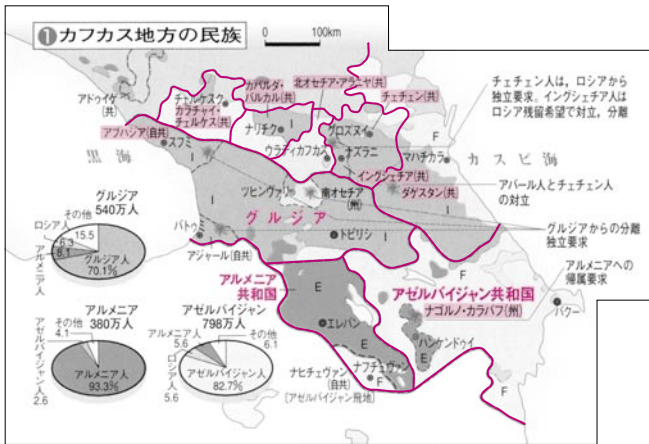
2004年9月、ロシア南部の北オセチア・アラニア共和国で学校占拠事件が起きた。生徒や家族1200人以上が人質となり、300人以上が爆発や銃撃戦で死亡、子どもを人質にした残酷なテロとして世界を驚愕させた。犯人グループはチェチェン人を中心とするイスラム原理主義の武装勢力だった。この地方はロシア語でカフカス、英語ではコーカサスと呼ばれる。次ページの地図にあるように黒海とカスピ海に挟まれ、面積は日本よりやや大きい約44万km²である。標高5000m級の山々が連なるカフカス山脈が東西約1200kmに広がり、南北の自然の境界線となっている。

山脈の南側にはキリスト教国のグルジアとアルメニア、イスラム教国のアゼルバイジャン3国がある。この3国は帝政ロシアとソビエト連邦時代にはロシア人の支配下にあったが、1991年のソ連邦崩壊の際に独立した。グルジアのアブハジア自

治共和国と南オセチア自治州はグルジアからの分離を求め事実上の独立状態にある。アルメニアはアゼルバイジャン領内のアルメニア人が多く住むナゴルノ・カラバフ自治州を94年以来占領したままで、停戦後の和平は実現していない。99年にはチェチェン側から武装勢力がダゲスタンに進入したが、撃退された。

山脈の北側はロシア領北カフカス地方と呼ばれ、民族ごとに7つの共和国－東から西にダゲスタン、チェチェン、イングーシェチア、北オセチア・アラニア、カバルダ・バルカル、カラチャイ・チェルケス、アドゥイゲ各共和国を構成している。

東西南北の民族移動や交易のルートにあたっていただけに歴史は紀元前にさかのぼり、民族構成や使用言語も多岐にわたる。7世紀にアラブ人が侵入して以来、イスラム教が伝播し、スンナ派の他にペルシャの影響を受けたシーア派もいる。学校占拠事件の起きた北オセチアのオセット人だけは数世紀前にロシア正教に改宗した子孫が多い。



タンとチェチェンの山岳地帯を中心にイママート（イマムの国ないし体制）と呼ばれ、3代のイマムに率いられて1830～59年にかけて存続した。なかでも3代目イマムのシャミーリー（1834～59年）が最も長期にわたって戦ったが、1859年にシャミーリーが投降してイママートも崩壊した。この後、西側のチェルケス人も撃破され、北カフカス全域が1864年までにロシアに征服された。帝政ロシアにとっても類例のない長い年月と多くの血と財を注いだ征服戦争だった。全カフカスが征服された1860年代にロシア人による支配を嫌って約70万人ものカフカス住民がトルコやトルコの属領のアラブ地域に脱出した。

ロシアによる征服戦争

北方のロシアは16世紀後半のイワン雷帝の時代からカフカスに進出するようになった。当時のロシア南部には自由農民の武装集団コサックが住んでいたため、コサックがロシアのカフカス征服戦争の先兵になった。コサックと山岳諸民族との抗争は今日にまで尾を曳いている。

帝政ロシアは18世紀半ばから北カフカス中央部の北オセチアの地に要塞を築き周辺にコサックや改宗した山岳民を入植させた。そして、そこを拠点に南下作戦を進めた。山脈の南側ではグルジア正教のキリスト教国グルジアがイスラム教国トルコとペルシャに侵略されて亡国の危機に瀕し、ロシア正教のキリスト教国ロシアに助けを求めた。ロシアは1801年にグルジア王国を併合した。

一方、北カフカスの山岳民は東西に分断されたままロシアの征服に頑強に抵抗した。東側のダゲスタンとチェチェンの諸民族はまとめて19世紀前半にミュリディズムと呼ばれるイスラム教の信仰を旗印に戦った。この信仰はイスラム教の神秘主義的傾向の強いスーフィズムの教団が核となり、指導者はイマム（導師）と呼ばれた。イマムは宗教指導者だけでなく軍事指揮官と支配地域の行政長官も兼ねた。イマムの率いる支配地域はダゲス

チェチェン人の抵抗

ミュリディズム運動の中核だったチェチェン人たちはロシアに征服された後もあらゆる機会をとらえて独立のために蜂起して抵抗した。1905年にロシア本国が民主革命の嵐に包まれた時、チェチェン人はコサックやロシア人に奪われた土地の返還を要求して反乱を起こしたが、鎮圧された。

1917年のボリシェヴィキ革命の際もロシアからの分離独立と「山岳共和国」の樹立を宣言した。1921年、革命政権の民族問題担当人民委員スターリンがカフカス入りして山岳民を説得した。その結果、北カフカス全域が一定の自治をもつ「ソビエト山岳共和国」としてソビエト体制内に組み込まれた。山岳共和国はその後、いくつもの自治州に組み替えられて自治は縮小した。

スターリンの鉄の統制下でもチェチェン人たちは反乱を繰り返した。1939年に第二次世界大戦が勃発すると、チェチェン人はまたも決起して山岳部からソビエト軍を駆逐した。これに対してソビエト政府はドイツ軍と協力した国家反逆者としてチェチェン人と兄弟民族のイングーシ人約60万人を民族ぐるみ貨車に押し込んで内陸の中央アジア・カザフスタンやウズベキスタンに強制移住させた。寒さや飢え、病気で10万人以上が死んだ。

スターリン死後の1956年に名誉回復が行われ、自治共和国も翌年に復活した。

現代のチェチェン戦争

現代のチェチェン戦争はこうした数百年におよぶ長い民族戦争の一コマとして再現した。

1991年12月にソビエト連邦が崩壊し、ソ連邦を構成していた15共和国が独立国家になった。人口100万人ほどの小さなチェチェンはロシア国内の自治共和国だったから独立した15連邦構成共和国より一段階下の行政単位だった。しかし、チェチェン人は流れに便乗して、同年、チェチェン共和国の独立を宣言し、ドゥダエフ共和国大統領の選出を強行した。

ロシア連邦政府は94年、この独立を武力で阻止するため軍を投入し、第一次チェチェン戦争（国際法上の戦争ではなく内戦）が始まった。連邦軍は10万人の大部隊と近代兵器を投入し、約8万人の死者が出た。96年に双方の代表によってハサヴェルト（調印場所のダゲスタン共和国の町の名）和平協定が調印された。停戦と5年後の2001年末までにロシア連邦とチェチェン共和国の関係（法的地位）を定めるという合意が盛り込まれたが、後者の交渉に関する合意は後に反故にされ、対立は振り出しに戻ってしまった。

イスラム原理主義の浸透とテロ

第一次チェチェン戦争をきっかけにサウジアラビアなどアラブ諸国やアフガニスタンからイスラム原理主義ワハブ派の兵士らが応援の義勇軍として入り込み戦闘に加わるようになった。彼らは数百人ほどの小人数で初めは脇役だったが、戦闘的で豊富なオイルマネーを持ち込んでいた。この義勇兵の中には原理主義への信仰からだけでなく19世紀にロシアの征服後に脱出したカフカス系難民の子孫も数多く含まれている。彼らはカフカスの伝統である血の復讐のためにロシア人を相手に戦っている。チェチェンの独立派内部ではこれら

外来の原理主義グループと手を組む者が増えていった。

チェチェン人の伝統的なイスラム信仰は世俗的な色彩の濃いスーフイズムだったので、外来のワハブ派と激しく対立するようになった。1998年には両派の支持勢力数千人が武力衝突して双方に百数十人の死者が出た。この時期を境に独立派の中の比較的穏健な民族派勢力は鳴りをひそめて筆頭格のマスハドフ共和国（二代目）大統領は政治の一線から退き行方も分からなくなった。代わってイスラム原理主義勢力と手を結んだチェチェン人のシャミーリ＝バサエフが頭角を現した。彼らはチェチェンだけでなく北カフカスのすべてのイスラム教徒の共和国をロシアから分離させて統一したイスラム国家を樹立する目標を掲げた。それは19世紀のミュリディズムの目標であり、1917年のボリシェヴィキ革命の際に宣言された山岳民共和国の再現をめざすものだった。

彼らは1999年8月、チェチェン共和国の境界線を越えて隣のダゲスタン共和国側に入り軍事拠点を作ろうとした。こうして第二次戦争が始まった。プーチン政権は2002年にこの反乱を鎮圧したと宣言したが、その後もアパート連続爆破、劇場占拠、地下鉄爆破、旅客機連続爆破、そして、北オセチア・アラニヤの学校占拠テロなどが続いている。

プーチン大統領はチェチェン問題をもっぱら「テロとの戦い」と決めつけて武力で鎮圧する政策を続けている。しかし、一連のテロの背景には数世紀におよぶカフカス諸民族対ロシア人との対立があり、イスラム教徒対キリスト教徒の宗教対立も見逃せない。連邦政府として、テロの原因となっている民族問題の解決に真正面から取り組まなければ、カフカスに永続的な平和はないだろう。

参考文献

植田 樹 (2004)「チェチェン大戦争の真実—イスラムのターバンと剣」日新報道

植田 樹 (2000)「コサックのロシア—戦う民族主義の先兵」中央公論新社